



TITLE:

ごあいさつ

AUTHOR(S):

梶田, 勲一

CITATION:

梶田, 勲一. ごあいさつ. 京都大学高等教育研究 1998, 4

ISSUE DATE:

1998-10-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/53535>

RIGHT:

ごあいさつ

梶 田 勲 一（高等教育教授システム開発センター長）

岡田渥美先生、福井有公先生の後を受け、第3代のセンター長に就任いたしました。本センターも早いもので創設から満4周年が経過し、立ち上げの時期はほぼ完了したように思います。これからは学内外で本センターの存在意義が経常的に問われることになるものと覚悟をしております。どうか本センターの研究活動に対し、これまで以上の御理解と御支援をお願いいたします。

先日公表された大学審議会答申では、21世紀の大学像に向け、大学教育の内容と方法の改善が大きな課題として挙げられています。時代の進展と科学技術及び学問の進歩を反映した専門教育の問い直しは当然のことながら、人間教育としての教養教育のあり方、国際的な活躍ができる能力の育成、そして何よりも課題探究能力の育成が重視されています。さらには、このための責任ある授業（講義・演習・実習等）運営が求められ、授業の設計・準備と同時に授業の評価の必要性がうたわれています。これに加えて、学生に対する厳格な成績評価の実施とその土台となる評価基準の作成が求められています。高等教育においてもコンピテンシー・ベースド・エデュケーション（学力保障の教育）の思想が大きく重視される時代になった、と言えるのではないのでしょうか。いずれにせよ、大学審議会の指摘する大学教育改革の課題のいずれもが、本センター本来の研究課題と大きく関わるものと言えるでしょう。意識調査・実態調査的な研究を通じて、実践検討的な研究を通じて、文献渉猟的な研究を通じて、さらには研究開発的な研究を通じて、本センターの研究を更に発展させていきたいものと考えております。

高等教育における教育活動の研究を目指す機関の設置も、ここ数年、急速に増えてきました。国立大学だけをとっても、広島大学、筑波大学を初め、北海道大学、東京大学、名古屋大学、等々においてセンターの設置が実現しております。いよいよ日本における大学教育研究（ユニバーシティ・ベダゴジー）も、競争・論争と連携・協力の時代に入りつつあると考えてよいでしょう。この意味において、本センターも今後は、各大学のセンターとの関係を深めつつ、多様な研究活動の推進を図っていききたいと考えております。この点での御理解御支援もよろしくお願いしたいと思っております。